詩篇 131
ボ・スターン・ブレイディー
2024年・10月・27日

“主よ、わが心はおごらず、わが目は高ぶらず、 わたしはわが力の及ばない大いなる事とくすしきわざとに関係いたしません。 かえって、乳離れしたみどりごが、 その母のふところに安らかにあるように、 わたしはわが魂を静め、かつ安らかにしました。 わが魂は乳離れしたみどりごのように、安らかです。 イスラエルよ、今からとこしえに 主によって望みをいだけ。**”**
詩篇 **131:1-3** 口語訳

この詩篇は短く、深い意味を持っています。しかし、理解するには、ある程度の研究と表面の下の考察が必要です。この詩篇が書かれた人々、つまりイスラエルの民が歌ったように、そのイメージは非常に意味を成していたでしょう。しかし、私たちにとっては、もう少し理解が必要です。（今日の私たちのフレーズのいくつかは、彼らには意味を成さないでしょう）

神を知る方法について少しお話しましょう。ほとんどの場合、それは言語と経験を通してです。私たちは関係を通して神を知っています。私も夫を関係を通して知っていますが、彼のことを説明したい場合、関係性に関する用語を使うことができますが、それらはしばしば比喩に流れ込みます。私たちはそっくりです。私たちは手袋をはめたようなものです。私たちの関係の無形で目に見えない側面、たとえば信頼について話す場合、預金と引き出しのある銀行口座という概念を使用し、私たちの信託口座はいっぱいであると言うでしょう。私たちはしばしば比喩を使って抽象的なものの具体的な意味を引き出します。そして聖書では、比喩は神と人間の性格や性質を説明するためによく使われます。

隠喩という言葉のギリシャ語の語源は「運ぶ」、つまりある場所から別の場所へ移動するという意味です。私が尊敬するある学者は、この矛盾は、すべての隠喩が必然的に足を引きずって歩くということだと言います。隠喩は私たちが知りたいことを正確に伝えることはできませんが、より近づくことはできます。ドナルド・ブラウンは、「平易な言葉では軽視されるものが、比喩の微妙さの中ではそれに見合う尊敬を得る」と言っています。 ですから、比喩は、神について、そして神と私たちの関係について語ろうとするときに私たちが頼る言語です。
詩篇 131 篇は比喩に富んでいます。比喩は私たちの舌にはぎこちなく感じられ、21 世紀の文脈では少し弱々しいかもしれませんが、私たちがそれを理解し、それによって神と私たち自身の心の両方をより明確に理解することが不可欠です。

ここには2つの主要なテーマがあります。1つ目は最初の詩にあります:
“主よ、わが心はおごらず、わが目は高ぶらず、 わたしはわが力の及ばない大いなる事とくすしきわざとに関係いたしません。**”**
詩篇 **131:1** 口語訳

私の心は高慢ではなく、私の目は傲慢ではありません。誰か、あるいは私自身が「傲慢な目」を持っていると表現した時のことを思い出すことはできませんが、この言葉の意味を研究すると、神との関係における犯人が明らかになります。実際、犯人という言葉は大げさな言葉ではないと思います。紀元前1000年のエルサレムではそうだったかもしれませんが、2024年のアメリカでは大げさな言葉ではありません。それはむしろ毒素であり、問題は野心です。

私の心は高慢ではなく、私の目は傲慢ではありません。私は大いなることに心を煩わせません。私たちの物事は私にとっては素晴らしすぎるのです。これは、神の設計により、一部の物事は私たちの手の届かないところにあるという考えを一層深める文章です。私たちが目指すものの中には、私たちが一生懸命、必死に、そして有能に働いたからといって実現する実際の夢ではないものがあります。それは、私たちの人生に対する神の心の本当の夢を見たり理解したりするのを妨げる気晴らしです。精神的、肉体的、霊的、または人間関係の健康の限界を超えて私たちを押し進める野心は、危険で魅惑的な麻薬です。人類の歴史のタイムライン全体、そして聖書のすべての文章のページで、信仰の道は、どんな時代や文化にも存在する現実を扱っています。しかし、時代や場所、文化の違いによって、大きな混乱や動揺が生じることがあります。それは、聖書で危険な障害として挙げられているものが、現在の文化で認められた特徴になったときに起こります。これについては、ユージン・ピーターソンの話を聞いてください:

「キリスト教徒の前には、それが何であるかを認識するのが難しいつまずきの石が置かれています。それは記念碑にされ、青銅で金メッキされ、装飾的なライトで照らされているからです。それは崇拝の対象になっています。しかし、明白な事実は、それが信仰の道の真ん中にあり、弟子としての道を妨げているということです。派手な衣装と名誉ある地位にもかかわらず、それは依然としてつまずきの石です。

私は、そしてこの詩篇がそれを裏付けていると思うが、アメリカでは野心は私たちにとってこのようになった。私たちは野心を妨げることはせず、絶えず努力する人々に報いる。私たちは、自らの野心のためにすべてを犠牲にした人々に記念碑を建てる。この誘惑は新しいものではない。それは、サタンが天から追放されたのと同じくらい古いものだ（イザヤ書 14:12-14）。ギリシャ神話には、罪のために呪われ、永遠に果実が手の届かない木の枝の下に立つタンタロスの寓話もある。この誘惑は新しいものではないが、新しいのは、私たちがそれを深く賞賛し、称賛していることである。
私たちは、影響力、権力、富、名声をほとんどのものよりも重んじる世界に生きており、神を賞賛すべき追求のリストからほぼ消し去ってしまった。（大学とフレッド・マイヤーの女性：神学）
教える: 願望と野心。

2 番目の考えは、実際の比喩の形で現れます。

“かえって、乳離れしたみどりごが、その母のふところに安らかにあるように、わたしはわが魂を静め、かつ安らかにしました。わが魂は乳離れしたみどりごのように、安らかです。”

詩篇 **131:2** 口語訳

ここに、穏やかで静かな子供がいます。母親の近くにいますが、必死にしがみついたり、もっと欲しがって泣いたりはしません。原語の「穏やか」は「平らにする、または水平にする」という意味です。私は狂って渦巻く感情を平らにし、欲望を平らにしました。静かになる = 満足する。乳離れした子供は、母親がもはや唯一の栄養源ではないとしても、母親の存在だけで十分であることを理解しています。母親の存在は、落ち着きと希望と助けをもたらします。 教える: 感情 - 誘導と駆動

これら 2 つのフレーズがどのように連動するかがわかります。私は、つかみどころのないものにたどり着くために努力し、手を伸ばし、努力してきました。果物がいつも手の届かないところにあるように思えると、失敗したように感じ、かごに果物を 1 つ入れることができたときには、自分の成功に酔いしれます。しかし、私は一人ではないし、自分のものではないことを思い出します。私は、私に必要なものを与え、支え、愛してくれる良い親に属しています。そして、それが、私を制御不能にさせようとする感情を平準化します。ポールは、このことを美しく語っています:

“さて、わたしが主にあって大いに喜んでいるのは、わたしを思う心が、あなたがたに今またついに芽ばえてきたことである。実は、あなたがたは、わたしのことを心にかけてくれてはいたが、よい機会がなかったのである。 わたしは乏しいから、こう言うのではない。わたしは、どんな境遇にあっても、足ることを学んだ。 わたしは貧に処する道を知っており、富におる道も知っている。わたしは、飽くことにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、ありとあらゆる境遇に処する秘けつを心得ている。わたしを強くして下さるかたによって、何事でもすることができる。**”**
ピリピ人への手紙 **4:10-13** 口語訳